

巻頭言

海業から見えてくるもの

デレーニ・アリーン (教授)

近年、「ブルー・グロース(Blue Growth)」という概念が、海洋資源の持続的利用や沿岸地域の発展をめぐる国際的な議論の中で広く用いられるようになってきている。一方で、日本を含むアジアの沿岸地域では、地域の歴史や生業、社会関係に根ざした沿岸振興の取り組みが各地で展開されてきた。日本においては、こうした実践は「うみぎょう(海業)」という言葉で語られることが多い。では、このような実践は、グローバルに共有される枠組みとの間にどのような関係にあるのだろうか。

筆者がこれまで関わってきたEU圏におけるブルー・グロースの実践では、海底資源開発や洋上風力発電といった新たな海洋利用が前景化する一方で、長年にわたり沿岸と関わってきた既存の利用や生業のあり方が、相対的に捉えられにくくなる場面も見られた。海をいかに「新たに利用するか」という発想が強調されるとき、従来の関係性が背景へと退きやすいことがうかがえる。

この点を踏まえると、日本の沿岸地域で展開されてきた「海業」(うみぎょう)は、ブルー・グロースとは異なる文脈の中で、海と社会の関係を構想してきた実践として捉え直すことができるだろう。そこでは、海は新たな資源として切り出される以前に、すでに多層的な関係の中に位置づけられてきた。また、日本に限らず、アジアの沿岸地域には、海と社会の関係を、特定の産業や政策枠組みに還元することなく、日常的な実践や関係性の中で捉えてきた多様なあり方が見られる。

筆者自身、これまで異なる地域や制度的文脈のもとで沿岸社会に関わってきたが、海との関係は、政策や産業の



愛媛県愛南町における海業の事例：里と海をつなぐ取り組み (ブロッコリー+柑橘の皮+トゲ切り=おいしいウニ)

枠組みだけでは捉えきれない、日々の実践や相互行為の積み重ねとして形づくられていることを、あらためて感じている。海業的な実践に目を向けることは、そうした関係性の厚みを、分析の出発点として位置づけ直す試みでもある。そこから見えてくるのは、成長や効率といった指標とは異なる次元で、海とともに生きる営みが組み立てられてきたという事実である。

概念が異なる文脈へと変化する過程において、何が見えやすくなり、何が見えにくくなるのか。

ブルー・グロースと海業的な実践を並置することは、アジアという場から、海とその利用をどのような前提のもとで構想してきたのかを問い直すための重要な手がかりを与えてくれる。



contents

- | | | |
|-----------------------|--------------|-----------|
| 1 巻頭言 | 4 30周年について | 7 著書・論文紹介 |
| 2 私の東北アジア研究 | 5 受賞・成果のニュース | 8 活動風景 |
| 3 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか | 6 研究成果 | |



韓国産カタツムリの多様性

木村 一貴

地域生態系研究分野／助教



筆者は2018年より、韓国における貝類の種多様性・生息範囲・保全の必要性などの把握に取り組んできた。ここではカラフトマイマイ属のカタツムリに関するエピソードを紹介させていただきたい。

近隣の日本やロシア・中国と比較して、韓国産カタツムリの研究は遅れている。ヨーロッパ・日本の貝類学者により韓国産カタツムリ研究の礎は築かれたが、その流れは数人の韓国人員類学者にしか受け継がれなかった。今日に至るまでに発表された文献を精査したところ、ヨーロッパや日本の研究者による初期の文献ではカラフトマイマイ属が5種、韓国の研究者による近年の文献では4種が韓国に分布するとされていた。構成にも隔たりがあり、前者でのみ記載されたものが2種、後者のみのものが1種であった。これらの文献で言及された計6種は、殻形態に基づき3つのグループに区別されていた。そのうち2つのグループは生息範囲が限定的な種のみで構成されていたが、第3のグループにはチョウセンマイマイ・タトヘマイマイ・クロダマイマイ（図1）が含まれ（以下、和名のマイマイは略）、3種の生息範囲を合わせると南東部を除いた韓国の全範囲だと推測された。このうちタトヘは韓国の研究者の文献では言及されていない。



図1. 殻の色合いが異なるが同系統に含まれる個体

い。文献により多少の違いはあるが、第3グループの3種間での形態的差異は主に殻の色とサイズであるとされていた。クロダは他の2種よりも大きく、殻は全体的にピンク味があるとされる。チョウセンは殻の口の部分が淡いバラ色を示し、タトヘは赤褐色の殻をもつとされる。しかし、殻の色やサイズなどの形質は、カタツムリにおいて同種内でも変異が大きい例が多く、それぞれが独立した種であるのかは明確ではなかった。そこで、第3グループに含まれると考えられる個体を南東部以外から採集し、DNA解析を用いて遺伝的な系統群の構成とその生息範囲について調査を行った。その結果、韓国には実際に3つの遺伝的に分化した系統が分布していることが明らかになった。分布の境界周辺を追加調査する必要があるものの、それぞれの系統の分布は重複していないように推測された（図2）。しかし、遺伝的なまとまりと形態的なまとまりが一致することはなく、それぞれの系統にサイズ・色彩による分類では別種にされる個体が含まれた。形態情報が有用ではない本ケースでは、区別できた系統と第3グループの3種を対応づけるために別のアプローチを採る必要がある。新規に生物種として記載される際には、模式標本と呼ばれる、その種の定義となる標本を1つもしくは複数作成することが一般的である。本ケースでは、系統と生息範囲に対応が見受けられるため、模式標本が採集された地点を調べることで、どの種に対応するかが判断できると考えられた。新種として記載した原記載論文や模式標本を収蔵している博物館から可能な限り採集地点に関する情報を調査したところ、1850年に記載されたチョウセンは朝鮮半島、同年に記載されたタトヘは朝鮮半島周辺の島嶼、1926年に記載された



図2. 各系統の推測される生息範囲。
地図データ：OpenStreetMap,
www.openstreetmap.org/copyright

クロダはソウル北部の北漢山が模式標本の採集地点とされていた。より早くに記載されたチョウセンの採集地点が明らかにできず、他2種の採集地点と近い可能性も残された。もし北漢山や韓国北部で採集されたものだった場合、チョウセンとクロダは同系統である可能性が高く、同種として扱うべき状況だと考えられる。その場合、クロダという名前（正確にはクロダの学名）は使用せず、先に記載されたチョウセンを使用すべきとなる。そのため、チョウセンの定義を確定できていない現状では、系統と種名の対応は付けられないままとなっている。

どの名前で呼ぶべきなのか結論は出していないが、韓国の研究者たちが見落としていた韓国南部に生息する種の存在を見出すに至り、それぞれの生息範囲についても知見が得られた。比較的狭い生息範囲に限られる系統も存在し、これらは保全上重要な知見だといえる。今後も韓国や東アジアの生物多様性に関する基礎的な知見を蓄積していきたいと考えている。

講演会

ロシア・ウクライナ戦争と地域研究



寺山恭輔

(ロシア・シベリア研究分野/教授)

会期 2025年12月5日

会場 東北大学マルチメディア教育研究棟

昨年12月5日(金)、全学教育の「東北アジア地域研究入門」の特別授業を兼ね、講演会「ロシア・ウクライナ戦争と地域研究」を開催した。2025年より発足したセンターの地政学研究部門の客員教授としてお招きした防衛省防衛研究所研究幹事兵頭慎二先生、同研究所の長谷川雄之主任研究官、センターからは高倉浩樹センター長と寺山が参加した。

現在進行中のロシアのウクライナに対する侵略戦争を題材に、若い人達に戦争や安全保障問題に関心を持ってもらいたいとの思いから大学生・高校生向けと銘打って企画された講演会である。4人のロシア研究者が現在の研究職に至る経緯を述べた第一部、進行中の戦争と自身の研究の関係について論じる第二部という二部構成であった。

大学のロシア語学科に進学した兵頭氏、長谷川氏とは異なり高倉氏、寺山は入学後にロシアに対する関心が芽生えたという点で、研究者になるまでの道のりは4人それぞれ異なるがベレストロイカ、ソ連崩壊、冷戦終結と新時代の到来といった時代背景に各々が影響を受けていたことが明かされた第一部だった。当然のことながら現在は、ロシアにおける直接のフィールドワークの道を断たれ、研究の仕方を模索していることも共通していた。

第二部で兵頭氏は中露朝首脳集結やトランプ米国大統領による米露接近という予期せぬ最近の国際情勢の大変動を指摘、ウクライナ全土への非合理的な攻撃を始めたプーチンについて、27年間の分析による「聡明な人物」プーチンという「相場観」が邪魔をしたとの指摘は興味深かった。また三本柱(中立化、非ナチ化、非武装化)によるウクライナの属国化を彼が要求し、西側との闘争という観点で国民をひきつける権力の維持装置と



して戦争が利用されている限り、平和を求めると疑わしいとも指摘、取り返しのつかない類似の事態を日本周辺で起こさせないことの重要性を訴えた。長谷川氏は戦時下のロシア地域研究として、統制下の不安定なインターネットだけでなく紙媒体の活用、様々な官公庁の機関紙、SNS空間の情報や地図情報、宇宙やサイバー空間に関する情報など文系研究者の視野拡大の必要性を訴えた。現状分析に従事していない寺山はプーチンの権力掌握過程、1990年代からの蓄財や出自に関する最新の研究、ロシアによるインターネットの武器化とそれに対抗するロシア国内外の対抗策等について紹介した。高倉氏は戦争開始後のロシア国内の動員令、少数民族の徴兵に対する抗議行動、国外避難についてサハ共和国、ブリヤート共和国を例にインターネットや新聞、逃走地となったモンゴルにおける現地調査を踏まえ、参戦することになった一般国民の対応について行っている研究を紹介した。

最後に講演した4人がお互いの発表について感想を述べあった。これまでの研究の蓄積、経験値と開戦後のロシアやプーチンに対する見方の変化、避難民との接触で実感するロシア国民の本音、ロシア国民のプーチ

ン支持の高さに対する評価、ロシア国民の受身的な態度の伝統、ソ連時代との連続性、「戦後」の将来等について述べあった。学生の質問時間が短く残念だったが活発な質疑応答がなされた。高校生の参加を促すため授業終了後に開始時間を設定したが90名の参加者(学内72、学外18うち高校生7)を得た。

年が明け米国のベネズエラ攻撃、イランの大規模な反政府暴動と武力鎮圧、中国軍高級幹部の肅清等、ウクライナ情勢と無関係ともいえない重大な事象が立て続けに生じている。エプスタインがロシアのハニトラ機関の役割を果たしたことも明らかになりつつある。日本の政財官マスコミ界に息を吐くロシア寄りの奇妙な連中が同様の罫にはまって活動している可能性もあるのだろうか?一方で、ウクライナは大寒波下の停電という危機的状況を迎えている。真剣にウクライナを助けようとする米国の世界秩序の先行きが不透明で「戦後」時代の完全な終焉を感じさせる今日、後背地のガソリンスタンド・ロシアを全面的に支援する中国、北朝鮮に対抗し、日本はウクライナ勝利のため民生品に限定せず全面的に応援、協力すべきである(2026年2月5日寺山恭輔)。(本講演会の録画は学内限定で本年3月31日まで公開中)



読売調査研究機構・連携講座

「東北アジア研究センター×大手町アカデミア」報告



石井敦

(日本・朝鮮半島研究分野／准教授)

会期 2026年1月15日

会場 オンライン

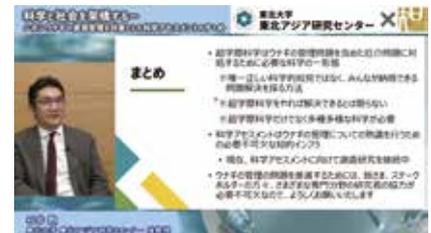
2026年1月15日、読売調査研究機構との連携講座「東北アジア研究センター×大手町アカデミア」で「科学と社会を架橋する」と題して講演した。連携講座はセンターとしては初めての試みだったが、応募総数572人、ライブ配信の同時接続数は359であった。おかげさまで、とても多くの方々が発信ができ、多数のご質問、フィードバックをいただけたこと、読売調査研究機構様、そして他関係者、視聴者の皆さまに深く感謝申し上げます次第である。

私の専門の一つである「超学際科学」は、科学的合意が不在で価値観が対立する「厄介な問題」に、社会と共に挑むアプローチである。本講演では、ニホンウナギの資源管理を事例に、研究者が政治

的ジレンマを回避しつつ社会貢献する仕組みとして「科学アセスメント」構想を提唱した。これは、ニホンウナギの保全にとって重要な問いに対して、独立の立場にある専門家が客観的根拠に基づいた回答を行い、最後に、規制強化から現状維持、規制緩和といった複数の政策オプションとその効果をまとめたレポートを発表することで、社会的な熟議のインフラを構築しようとする試みである。

後半の読売新聞・安田幸一編集局次長との対話では、不確実性が高い中での予防原則の適用や、多様な利害関係者の巻き込み方について議論を深めた。ポスト真実の時代において、合理的な意思決定を実現するには、専門家からの発信だけでなく、市民社会の側から「科学的知見

に基づいた判断」を求める声を上げることが不可欠である。本講演が、研究と社会をつなぐ一助となれば幸いである。



科学と社会を架橋する～ニホンウナギの資源管理を対象とした科学アセスメントのすゝめ (東北大学 東北アジア研究センター×大手町アカデミア)

<https://youtu.be/MrTjyz2faYs?si=3P6-aHKRfviQwLmR>

読売調査研究機構

(<https://www.youtube.com/>

@ 読売調査研究機構 -k1u)

動画へのアクセスはこちら ▶



30周年記念をなぜ行うのか？

石井弓 (中国研究分野／准教授)

5月15日、16日まで3か月となった。30周年記念式典を前に、この行事をなぜ行うのかを書いておきたい。とはいつても、私が実行委員長を依頼されたのは着任2年目であり、手探りの中で考えたものなので、私見も大いに挟み込まれていることをお許し願いたい。

20周年のパンフレットは、「前世紀末」という言葉で始まっている。テーマは「地域研究の新たなパラダイム」であった。当時は前世紀末から続く安定した政治状況の中で、地域研究が広がりを見せていた時期と言えよう。これに対し、30周年が視野に入れるのはポスト・ポスト冷戦期である。ロシア・ウクライナ戦争をきっかけに世界が再び大国どうしの対立へと歩を進めるなか、学術研究は政治から制約を受けている。一方でAIの発達で膨大な情報を処理できるようになった

が、同時に思考や創造とは何かが問われている。30周年の今を生きる私たちは、新たなダイナミズムの中で研究の方向性を問いなおす必要があるのだ。10年を画期として世界の変動を確認し学問の方向性を問い直すこと、それがこの記念行事の役割であり、30周年のテーマ「進化と戦争から再考する地域研究」は、昨今の世界的動きを捉え返そうとするものだ。記念講演では、川島真氏 (アジア政治外交史)、Thomas Carrie氏 (文化進化論) に、進化と戦争の側面からご講演頂く。「総合セッション」では、歴代のセンター長たちが東北アジア研究のこれからを議論する。そうして研究の現在と未来の大きな地図を広げた上で、2日目のセッションでは、戦争と記憶、デジタルヒューマニティとオープンサイエンス、進化といった具体的なテーマから研究発

表と議論を行う。2日間を通して現時点における東北アジア研究の学問の在り方や今後の可能性を論じ、次の10年への見通しを付ける。これが、「30周年」の目的であろうと、私は考えている。



30周年記念式典ポスター

比較文明学会研究奨励賞（伊東俊太郎賞）

高城建人（准教授）

この度、拙著『韓国黎明期の民主政治への試み：大統領制と議院内閣制の攻防』（明石書店、2024年）が、複数の文明間の関係を研究対象とする比較文明学会において研究奨励賞（伊東俊太郎賞）を受賞することとなりました。研究者として初めて出版した著書が学界で評価をいただいたことを大変光栄に思うとともに、選考委員ならびに学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本書の執筆にあたってご指導・ご助言をいただいた諸先生方、資料収集や研究環境の面で支えてくださった関係者の皆様にも、この場を借りて感謝申し上げます。

本書は、従来の「独裁か民主主義か」という価値判断中心の議論から距離を置き、李承晩政権と保守野党が民主主義をどのように理解し、実際の政治過程の中でどのように実践しようとしたのかを一

次資料に基づいて検討したものです。また、政治史研究を基盤としつつ政治思想史の視点を接合し、「李承晩政権＝独裁政権」という単純な図式を越えて、その志向した政治の内容や成果・限界を具体的に明らかにすることを試みました。さらに、独立直後の韓国政治を、新生独立国家に見られる多様な政治展開の一事例として位置づけ、西欧中心の理論だけでは捉えきれない政治過程を意識して分析しています。とりわけ、同時期の新生独立国家の政治体制や民主主義理解との比較を通じて、韓国政治の位置づけをより立体的に明らかにしようと試みました。本賞を比較文明学会からいただいたことは、こうした比較文明的視点が一定の評価を得たものと受け止めております。

もっとも、本書には思想史部分のさらなる検討、社会変動への視点の強化、アメリ

カの影響に関する分析など、今後取り組むべき課題も残されています。今回の受賞を励みとして、これらの課題に取り組みつつ、より広い国際的視野の中で研究を進展させていきたいと考えております。



研究奨励賞受賞時の記念スピーチ

第15回東北大学若手研究者アンサンブルワークショップにて優秀講演賞

朴勲 学術研究員（受賞当時）（現職：特任助教）

本センターの朴勲学術研究員（当時）が、第15回東北大学若手研究者アンサンブルワークショップにて優秀講演賞を受賞した。

本ワークショップは、東北大学附置研究所・センター連携体に所属する若手研究者が部局や専門分野の枠を越えて研究成果を共有し、分野横断的な議論と研究連携を促進することを目的として開催されている。本受賞は、ワークショップの趣旨に沿った研究発表として、多くの参加者の関心を集めた成果である。

受賞対象となったポスター発表は、複数部局の研究者による共同研究の成果として行われたもので、タイトルは「国境を越える多元的生活実践の諸相：中国・ロシアにおける小規模出稼ぎ『ポツリチャンサ』から」である。本研究では中国東北部とロシアを行き来

するコリアン・チャイニーズ（朝鮮族／Chaoxianzu, Joseonjok）の小規模出稼ぎを対象に移動経路や取引形態といった経済的側面にとどまらず、日常生活実践に着目し、複数の国家・制度・社会関係を横断する生活世界のあり方を検討した。1970年代後半の「改革開放」政策や国有企業のリストラ（下崗）などの構造的変動のもとで、特に女性は既存の労働空間を失い、商業活動へと活動領域を拡張してきた。従来の研究は沿海地方やサハリン州に焦点を当ててきたが、本研究ではフィールドワーク・半構造化インタビューから得られた事例データの分析を通じて、モスクワやアストラハンといった遠隔地への広域的移動の展開とそれを支える生活実践の連続性を示した点に特徴がある。



発表ポスター

研究成果「最初のアメリカ人起源に新説」 Science Advances

アフリカで誕生した現生人類はユーラシア大陸へ拡散した。そして最後の氷期の終わり頃、アメリカ大陸へ移住した。しかし、その時期や方法については長らく議論されてきた。従来人類はシベリアからベリンギア陸橋を経て、カナダ北西部に出現した無氷回廊を南下し、大陸氷床の南側へ到達したと考えられてきた。この解釈は、古代ゲノム研究が示す最初のアメリカ人の北東アジア起源についての地域的理解にも多大な影響を及ぼしてきた。一方、近年ではアイダホ州のクーパーズフェリー遺跡をはじめとする複数

の遺跡の年代から、無氷回廊が形成される以前に人類は舟を使い、環太平洋の海岸沿いを移動してアメリカ大陸に到着したと推測されている。しかし、その起源については明確ではなかった。

当センター飯塚文枝客員研究員らの国際研究チーム（研究責任者：ローレン・デイビス博士）はこうした問題に応えるため、古代サハリン北海道千島半島（PSHK）を起源と仮定し、日本北部の後期旧石器時代と無氷回廊形成以前の北米初期の遺跡群の石器製作技術を体系的な比較してきた。結果、特に、更新世後

飯塚文枝
(客員研究員)



期の PSHK、とりわけ北海道において剥片・石刃石器技術と有茎石器を含む両面加工石器技術の類似性が認められ、最も高い起源候補として位置づけた。本研究では、約 2 万年前もしくはそれより少し前に PSHK を出発した舟を使用する狩猟採集民が長い時間をかけて環太平洋岸を経て大陸氷床の南に到着したと解釈している。

[論文]
Madsen et al. (2025) Characterizing the American Upper Paleolithic. Science Advances 11, eady9545.
DOI: <https://doi.org/10.1126/sciadv.ady9545>

深海底に広がるプチスポット火山の活動範囲を 鮮明に描き出す新時代の海底地質調査

東北アジア近海のプレート沈み込み帯で発生する巨大地震の原因や、地球内部で起こる物質循環の実態を理解するためには、沈み込む太平洋プレートそのものの理解が不可欠である。2000 年代に入ってから沈み込む古い太平洋プレート上で発見されたプチスポット火山活動は、太平洋プレートの深海泥や構成岩石などを直接改変させていることが分かってきた。この改変された海洋プレートがプレートテクトニクスにより海溝から地球深部へと沈み込んでいたのである。

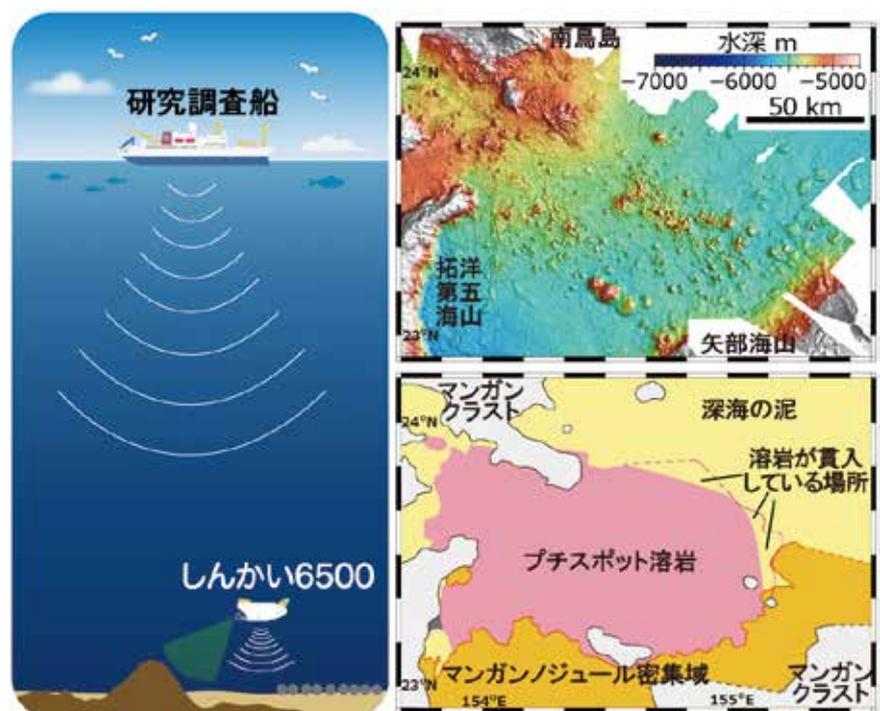
千葉工業大学、海洋研究開発機構、ビジオテックス株式会社、早稲田大学、および筆者の共同研究グループによって、研究調査船による広範囲の音響観測と、有人潜水調査船「しんかい 6500」による海底の近傍における高い空間解像度の音響観測を組み合わせることでプチスポット火山の活動範囲や海底資源の分布範囲を正確に特定することが可能となった(図)。この新しい地質調査手法は、学術誌 Scientific Reports から昨年発表された。提案された「プチスポット火山の活動範囲を正確に特定することのできる

地質調査手法」は、プレートの改変現象そのものに限らず、関連する地質現象を解明する革新的な技術である。

平野直人
(地球化学研究分野/教授)



[論文]
Machida et al. (2025) Integrated acoustic identification of a petit-spot volcanic field in the oldest Pacific plate. Scientific Reports 15, 32378.
DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-025-15806-y>



千葉工業大学プレスリリース (2025 年 9 月 9 日)



岩谷堂給主史料 武備盛衰記

鈴木淳世監修・藤方博之校訂・片平古文書会編集

text: 鈴木淳世

福井大学教育学部歴史学研究室 2026年02月刊

本書は、2023年から開始された「岩谷堂猪狩家資料」（岩手県奥州市所蔵）の調査の成果の一部である。「岩谷堂猪狩家資料」とは、仙台藩の領主・仙台伊達家（表高620,056石・大広間席）の直臣でありながら、仙台藩領陸奥国江刺郡片岡村岩谷堂館（現岩手県奥州市江刺岩谷堂館下）周辺地域5,015.92石を領有していた一門・岩谷堂伊達家に「給主」として預けられていた下級武士・猪狩作右衛門家の史料を中心とする文書群である。猪狩作右衛門家とは、元々、岩城（現福島県いわき市）の武士であったものの、江戸時代初期に岩谷堂館下へ移住してきたという経緯をもつ家柄である。その経緯について記されたものこそが「岩谷堂猪狩家資料」中の「武備盛衰記」という題名の

書物であり、それを翻刻・現代語訳し、さらに解説を付したものが本書の内容となる。

なお、上記調査は科学研究費の助成を受けたものであり、元々、監修者は研究代表者の藤方博之氏（福井大学准教授）に誘われて関与したにすぎなかった。しかし、そのうち重要な史料の一つ「武備盛衰記」を共同で翻刻・現代語訳することとなったため、監修者は自ら講師を務めていた片平古文書会のメンバーと共に解説にあたり、猪狩作右衛門家など「岩谷堂給主」11家の身分に関する解説を執筆した。そして、藤方氏の校訂を経て成立した共同作業の労作が本書であり、仙台藩「給主」研究の一助となることを祈念している。



ISBN 9784815633370

「科学的に正しい」の罠

千葉聡著 SBクリエイティブ 2025年10月刊

text: 千葉聡

「人間を語る知」は、近代社会の権力と不可分である。ミシェル・フーコーは、中立性や客観性が「統治の資源」になり得ると指摘したが、現代における「科学的な正しさ」への強固な信仰は、まさにそれが内包する政治性の強さを映し出している。「科学的な正しさ」は、イデオロギー支配の武器として、あるいは不可視化された価値観を正当化する護符として権力化し、政治的に利用されることで社会を危険にさらしうるのである。本書ではその実例として、旧ソ連のスターリン体制下で起きたルイセンコ事件、欧米を席卷した優生学、創造科学といった歴史的出来事に加え、進化心理学、生態系保全をめぐる議論、再現性の危機など、現代科学が

抱える課題も幅広く取り上げ、「科学的な正しさ」に潜む罠を具体的に示していく。

科学の言説においては、事実とそれに絡みつく価値観を完全に分離することはできない。「価値中立な科学の説明」「政治的に中立な科学の説明」は幻想である。それゆえイデオロギーの凶器となった科学が社会を不幸に陥れるのを避けるには、科学の説明にどんな価値観が絡みついているかを見抜く必要がある。また科学を語る者も、自らの価値観を常に意識しなければならない。そのためのアプローチとして本書では、自己点検にもとづき行為と思考を不断に修正していく——再帰性の意義を強調する。

地域の歴史を読む 大河原古文書サークル

寺内由佳

(上廣歴史資料学研究部門／助教)



仙台から電車で35分、蔵王連峰を望む白石川沿いの「一目千本桜」で知られる大河原町で、有志が集う「大河原古文書サークル」が月に一度、中央公民館を拠点としながら活動しています。上廣歴史資料学研究部門ではいくつかの古文書解読講座の主催および協力をしています。こちらには昨秋より私が講師として出向いております。

古文書解読講座の参加者は、大河ドラマなどの映像作品や博物館の展示などを見て、自分でくずし字を読めるようになりたいと志す方も多のですが、生まれ育った、あるいは生活の拠点となっている地域の歴史を深く知りたいという思いから学びの場に足を運ぶ方も少なくありません。大河原古文書サークルでは、地元に残存する歴史資料の活用を基本とし、主に当部門が所蔵する資料(古文書)の写真データからテキストを選出しています。現在は大河原町金ヶ瀬で検断を勤めた鈴木弥五右衛門家に伝わる文書を活用しています。検断は宿場で伝馬継立などの業務を

はじめとする行政担当者であったため、当家の文書には大河原町とその近隣地域で起きた訴訟に関する記録が含まれています。

例えば文化10年(1813)に作成された資料を読むと、柴田郡大谷村の百姓は、えごま油や菜種、染料となる藍などを仙台北下や大河原・白石の市中へ直接持ち込んで売る、ということをしてきましたが、ある時から、大河原・白石方面へ向かう際、金ヶ瀬や宮町の者がやって来て、彼らの進行を妨げるという事態が起きるようになりました。そこで大谷村の百姓たちは自らの正統性を主張しながらあれこれと提案を、なんとかこれまで通り自由に売買ができるよう、金ヶ瀬をはじめとする諸所の役人たちに訴え出ます。

一連のやりとりの中で、大谷村の百姓たちがどのような販路を持っていたのか、つまり、どこまで売り歩いていたのかという点がポイントとなります。大河原周辺の地名もたくさん登場しますので、解読をすすめながら議論

も盛り上がります。「あそこは山道なので、迂回してこちらへ行ったのではないか」「昔はもっと広い範囲を〇〇(地名)と呼んでいた」など、地元の人ならではの知識と感覚が解読のヒントとなることも多く、私も新たな知識を得ております。普段の生活では気にならない、あるいは忘れられていた、土地の記憶とも言うべき情報を引き出すことができるのは、地元の資料を読むことの大きな意義であると感じられます。

古文書解読における上達の術は、くずし字を読む機会を継続的に持つことと、様々な内容の資料にふれることが重要であると考えています。また、文字を読み取ることだけが「解読」ではありません。自分一人では何が書かれているのかよくわからなかった文章でも、皆で意見を出し合うなかで具体的なイメージを掴むことができます。地域の歴史に光をあて、一つ一つ積み上げていく過程を楽しみながら、講師としてサークルの今後の発展をサポートしていきたいと思っております。



1: 活動拠点の大河原町中央公民館

2: 古文書解読講座の様子

編集後記

厳しい寒気が長期間居座っていて2月20日あたりまで寒い日が続いていましたが、それが明けた途端に平年の気温を上回る日が続いています。紹介しました大きなイベント2件、センター30周年記念、受賞記事2件、研究成果プレスリリース2件、季節が明けて暖かくなったと同時に今号も熱いです!(平野直人)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第108号

2026年3月27日発行

編集: 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行: 東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X(旧Twitter)
をチェック!

